

続・保育の中の小さなこと大切なこと⑧

守 永 英 子

卒業まで、日かずを教えるほどに迫ってくると、保育者として、それまでにしておかなければならない事どもに、心を捉われる。それは、子どもたちが、それぞれに、それなりに落ちついた状態になってくるからでもある。

そんなある日、私は、思いがけず、Tの母親から、相談の申し込みを受けた。"最近、Tの様子が、少しおかしいものですか"と言う。あと一息で、無事卒業の運びと、少し安堵していた私は足もとをすくわれた思いで、とまどいながら、早速、話を聞くことにした。

母親の話では、最近、Tが"誰も、私と遊んでくれない"と訴えたとのことであった。しかし、母親が見たところでは、近所のお友だちが遊びにみえても、自分ひとりでも本を読んだりして、Tの方が、遊ぼうとしない。又、以前から幼稚園が好きな子どもで、今までは、決して休もうとしなかった。今年度は、一日も休んでいないと、自慢にしていたが、最近では、どちらでもいいというような態度をする、というこ

とである。

Tは、おとなびた女の子で、口も達者である。入園当初から、よく、女児のグループの遊びのリーダーシップをとっていた。他の子どもたちを、自分の思い通りに動かそうとするところが強く、その周囲の子どもたちも、"Tに、いじめられた"と訴えにくることが多かったが、この頃は、トラブルもずつと減り、Tも穏やかになったと思っていた。Tは、いつも、デンジマンごっこや、バレーボールなどのグループの中において、積極的に動いていることが多く、遊びに入れないで、ぼつんとひとりでいる姿を、私は、目にしたことがなかった。母親のいうTの変化は、卒業期の忙しさにかまけ始めた、ごく最近のことに違いない。母親の話から察すると、Tの対人関係は、ここで、又、一つの変化をみせているようである。

一体、どういうことなのか。卒業までの、あと僅かな間に、何をすればよいのか、何ができるのか。

心を駆けめぐらせながら、一見、マイナスの状況に見える
Tの変化が、長い目でみて、必ずしもマイナスではないのでは
ないかと思えた。Tにとって、一時的に行きづまりの状態
となっても、今までのTの友だち関係、つまり、支配Ⅱ服従
の関係は、変化していくことが、望ましいのではないか。
翌月、登園してきた子どもたちが、それぞれの遊びに散っ
ていった頃、私は、Tの姿を探した。遊び室で、バレーボー
ルをしているグループを、じっと見ているTの姿を見つけた
時、子どもの心の変化に気づかなかった自分の至らなさに、
心の痛みを覚えた。

Tに、「どうしたの？」と声をかけるべきだろうか。それ
とも、バレーのグループに、「Tちゃんを入れてあげて」と、
言葉を添えてあげるべきだろうか。どれにも確信が持てない
まま、ちゅうちょしている私に、Tの方から声をかけた。「先
生、わたしに、何かご用だった？」Tの語調には、自分の中
に踏み込ませない冷静さがあった。

彼女の中に立ち入らないで、彼女のためにしてあげられる
こと……を求めて、私の心は駆けめぐった。いっしょにいて
あげること、それも、自然な形で……。

私はあわてて、云うべき言葉を探した。

「絵の具を溶くのを、お手伝いしてほしいと思って。」と言
う私に、Tは、素直に答えた。「いいわ、お手伝いしてあげ

る。」

紙粘土で作ったおひなさまの仕上げのために、絵の具の用
意が必要であった。二人で、保育室に戻って絵の具を溶きは
じめると、MやYが、「手伝わせて」と加わった。Tも、「じ
ゃあ、これやってもいいわ」と、すぐに仕事をゆずり、「わ
たしが前からやってたのだから、これはわたしよ」と、別の
絵の具を溶くことを主張した。しかし、以前のTと違って、
ずっと穏やかで、遠慮がちな語調だった。私は、ここに、T
の変化を感じた。

絵の具の用意ができはじめると、おひなさまを仕上げよう
という気持も起きてきて、Tを含む四、五人の女の子たち
が、和やかな雰囲気でおひなさまに色をつけはじめた。

翌朝、Tの母親から、「昨日は、お友だちに入れてもらえた
そうです」と報告があった。

更に、数日後、「この頃は、素直になって、私との関係も
うまくいっています」とのことであった。Tの母親は、「私
は、この子と合わないんです」と、言っていたのである。

問題は、周囲の子どもの態度ではなく、Tの側の、心のわ
だかまりだったように思う。私に出来ることは、「ありのま
まのT」と共に在ることだけであった。充分ではないにしても、
卒業までに、一応の解決をみて、ほっとしたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)